



社志さんのヤンチャ時代、お店の前にて



理佳さんがハワイホノルル大学通信科で博士号を取得



「家業」を「企業」に…
3代目が継ぐ大きなビジョン。

承継

Project

File.05
中央統括東京本部
小松 理佳
小松 壮志

今回ご紹介させて頂くのは、中央統括本部の小松理佳さんとその息子・社志さん、この親子の「承継」である。
「承継」…と言いつには、まだまだお若いお二人。爽やかな笑顔が素敵な親子であるが、やはりここまでに至るには、ドラマがあった。彼らがどのような道を歩んで来たのか、ご紹介させて頂こう。

美容に入るきっかけ

理佳さんの母は住居を構える東京・足立区の住宅街の一角に、美容室を開業していた。いつも馴染みのお客様と、1日中笑って楽しそうに営業をしている母の姿を見て育った理佳さんは、中学生の頃から「私も美容師になりたい」と思っていたそう。こんな楽しそうにしている、お金まで貰えるなんて、なんて素晴らしい仕事だろう…と幼心に感じていたそう。

反面、母はなかなか続かないスタッフたちに苦労していた。母としては娘にこんな苦労をさせたくない、普通に大学まで出て欲しい、と願っていた。しかしその反対を押し切り、理佳さんは高校に通いながら通信で美容師免許を取得。高校卒業と同時に他店へ修行に出たそう。

修行に入った店は都心にあるサロンで、住宅街にある母の店とは規模が違い、活気づいていた。そこでスタイリストとして3年程働いたのだが、21歳の時に結婚・妊娠を機に退社。

夫の地元・岐阜県に移住し、2児を出産した。しかし結婚生活は長くは続かず、夫のDVが原因で離婚。理佳さんは2人の子供を連れ、再び東京の実家に戻った。岐阜でもパートで美容師をしていたが、地元でもパートで入れる美容室を探した。そして入店したのが、SPC会員の今泉氏のサロンであった。

独立開業と子育て

今泉氏の経営するサロンはスタッフ同士が仲良く、理佳さんは楽しく仕事をしていた。しかし1年も経たずして、母の強引な力で、独立開業をする事になった。母に手伝って貰いながら、自分の店を持った理佳さんは、育児と仕事に奮闘した。

しかし、2人の息子は年頃になるとかなりのヤンチャ振りで、お店の前に凄い改造バイクで乗り付けたり、いわゆる「ギャル男」という風貌で、地域密着で営んでいる事もあって、ご近所からも悪目立ちするようになってしまった。人様に迷惑をかけるような事はなかったが、理佳さんは反抗期の息子たちにかなり手を焼いたそう。

「とても口には出せないような事が、これまでたくさんありました(笑)。社志もですが、お兄ちゃんも。何とか寄り添おうと思って、当時流行っていたエグステを付けてあげたりして、ギャル雑誌に掲載された事もあるんですよ(笑)」
当時を思い出して、理佳さんは苦笑した。

SPC入会

理佳さんがSPCに入会したのは、今から14年前、第22代松原理事長の時代であった。以前ご縁のあった今泉氏に誘わ

れたのがきっかけである。
理佳さんは長らく住宅街で営業していたわけだが、独立時代に務めていた駅前の美容室のような、活気のある2号店を作りたい！と考えていた。経営を学ぼうとSPCに入会したものの、会議では男性同士が声を荒げる場面もしばしば。SPCは理佳さんにとって、ただただ「怖い所」であった。

しかしある時、横山室長に教わった哲学の中に、「打ち叩かれてもしぶとく振る舞い、静寂の奥にマスターキー「III」を掴み、生命に刻み、確信に満ちて生きる」という言葉があった。この「打ち叩かれてもしぶとく振る舞い」というフレーズは、理佳さんの意識に深く刻まれたという。

「とにかく、乗り越える事が大切だ！と解釈したんです。横山室長の哲学とは、つまり物事の考え方。確かにSPCは大変なところだけれど、息子たちの反抗期に味わった苦労に比べたら、何て事はない！と気持ちがあふれて、それからは楽しく組織活動ができるようになったんです」
と理佳さんは言う。

それから理佳さんは、SPC哲学を率先して学んだ。資質表現教育から始まり、青春の物語も社員に落とし込み、横山室長が主催する毎週金曜日に行われている朝会には10年間も通い続けたそう。

